

中部の

エネルギーを築いた人々

三河水力電気の合理的経営を進め、
伊那電気鉄道を再建した 櫻木亮三

東邦電力発足時の大正11年、九州駐在の常務取締役役に就任した櫻木亮三(1880~1955)は、昭和2年以降、三河水力電気社長、伊那電気鉄道社長、中央電力会長、合同電気専務取締役、矢作水力取締役、三信鉄道取締役、中部配電理事など中部各地の電気事業や鉄道事業の経営に携わり、堅実な事業経営で着実に業績をあげ、また事業の整理や合理化に手腕を発揮した。三河水力電気は合理的経営の模範といわれ、不振に陥っていた長崎電灯、伊那



櫻木亮三(写真提供:櫻木邦衛氏)

電気鉄道、信貴生駒電気鉄道の再建を果たし「整理の神様」・「更正の恩人」と呼ばれた。

櫻木亮三の生い立ち

櫻木亮三は、明治13年2月佐賀県に生まれた。佐賀中学、第一高等学校を経て東京帝大法科大学政治科を明治39年7月に卒業し、大蔵省に入省したが、翌年退官して郷里佐賀に戻り、十八銀行入りした。大正2年、請われて、経営不振の長崎電灯に移り、支配人として再建にあたったが、それが電気事業に関わるきっかけとなった。同社は、大正5年、松永安左工門が活躍していた九州電灯鉄道に合併され、長崎支店長・



欧米旅行中の櫻木亮三
(写真提供:櫻木邦衛氏)

佐世保支店長などを勤め、取締役支配人に栄進した。大正11年6月、東邦電力が発足すると、九州駐在の常務取締役となり、また福岡市市会議員、博多商工会議所の副会頭なども勤めた。大正13年に常務取締役を退いた後、8ヶ月に亘り欧米諸国の電気事業を視察(大正15年)した。昭和に入ると舞台を中部地方に移し、三河水力電気の経営、伊那電気鉄道の再建等に手腕を発揮した。昭和30年11月、75歳で没した。

合理的経営の模範、三河水力電気

昭和2年5月、櫻木は三河水力電気の専務取締役に就任した。同社は、当初早川電力が水利権を取得して事業化を目指していたが、

関東大震災で打撃を受けて東邦電力に合併されたため、東邦系の会社として大正13年11月に設立された。経営陣には神野金之助(第2



三河水力電気 越戸発電所(当時)

代社長)、藍川清成(第3代社長)ら名古屋財界人が多数加わり、櫻木は代表取締役専務として経営を担い、昭和11年5月、第4代社長となった。同社が建設した越戸発電所(7500kW)は、矢作川最下流に位置し、名古屋・岡崎の需要地にも近い経済的な発電所として運転され、合理的経営の模範と言われた。昭和3年2月に東三河山間部に供給する東三電



越戸ダム堰堤に建つ「三水湖碑」
(昭和5年9月建立)

気を合併し、昭和13年8月には南信電気等と合併して中央電力と改称、櫻木は取締役会長として経営を統括した。同社の解散に際し、越戸発電所の従業員は感謝状を寄せ、櫻木を「慈父」と呼び「十数年間設備の故障に依る停電事故は一回も惹起」しなかったと述べている。

伊那電気鉄道の再建

櫻木は昭和6年12月から伊那電気鉄道の代表取締役として経営再建にあたった。同社は明治40年9月に創設され、中央線辰野駅から飯田(大正12年開通)・天竜峡(昭和12年開通)まで電車運転するとともに、沿線に電灯電力を供給した。同社を率いた伊原五郎兵衛は、櫻木と大学の同級生で、東京帝大法科を卒業後、郷里に戻って事業家として活躍し、



伊那電気鉄道 飯田営業所

昭和3年には国会議員にもなっていた。伊原は積極的に事業を拡大したが、昭和恐慌時に巨額の債務を抱えて経営不振に陥り、自身も健康を害して入院したため、同社関係者は松永



伊那電気鉄道功労者
伊原五郎兵衛

安左工門に救済を求め、再建役として櫻木が指名された。櫻木は、友人の会社として再建を引き受け、社内整理の断行、銀行との負債整理交渉を進め、昭和11年上期には復配にこぎ着け「整理の神様」と称された。同社は、昭和17年に電気事業を中部配電に統合、鉄道事業は昭和18年に国有化されて飯田線となった。

(浅野 伸一)